

校長室だより

共学共高

第
98
号

令和8年9月26日発行

発行責任者

白梅学園高等学校長

武内 彰

授業研究週間始まる

本校では、毎年二学期に「授業研究週間」と銘打って、教員間で自由に授業を見せ合って学び合う期間を設定している。S先生の1年5組での歴史総合の授業を参観したので、報告させていただく。

9月25日（金）第2時限目の歴史総合は、「日清戦争後の東アジア」がテーマである。チャイムと共に授業が始まり、生徒たちは「お願いします」とあいさつをする。電子ボードにはスライドが映し出される。主題の問いとして、「日本、中国、朝鮮との関係はどのように変わっていったのか」が示される。生徒たちはこれを確認して授業に参加していく。

まずは、日清戦争の簡単な復習からである。日清戦争では、メディアの情報によって、（日本の）地域社会の人々も先生を体験したと言えるが、「当時のメディアはどのようなものがあったのだろうか？」とS先生から投げかけられる。生徒たちはペア又は3人グループになって意見交換する。私の目の前にいる3人グループでは、「新聞、ラジオ・・・手紙？」といった単語が交わされている。指名された生徒たちは、「新聞」「本」「掲示板」と答えている。そこで、S先生が1枚のスライドを提示する。当時の中央新聞の号外である。戦争で日本が勝っているという記載を確認する。具体的には「清艦七隻撃沈・・・」といった記載である。続いて、錦絵が映し出される。「日本軍が戦っている様子」や「清艦が沈んでいく様子」が描かれたもので、「文明化された日本が文明化されていない清に勝ったのだ」という趣旨が背景にあるようだ。同様に、「コレラがどうして清に行こうとしているのか」という錦絵も紹介される。

続いて、下関条約によって遼東半島は日本に領土となるはずであったのに、「日本の領土になることを恐れた国はどこか？」という投げかけがなされる。地図を見ながら、指名された生徒が「中国？」と答える。「それ以外は？」と聞かれると「ロシア」と答える。まさしく、ロシアは日本が中国東北部に進出することを警戒していたのだ。よって、ロシアはドイツ、フランスと共に日本に対して遼東半島の返還を要求する。これが三国干渉だ。日本はその要求に応じて、清へ返還することになった、との説明がある。日本が得た植民地は台湾が中心となったが、清は日本に対する巨額の賠償金を工面することに苦慮するのである。清は、列強からの借金と引き換えに利権を提供し、国内の分割が進む。どの国がどの地域を抑えた

のか色別の地図が示される。S先生は「遼東半島はどこの国のものになっている？」と問いかけ、ロシアのものとなっていることが共有される。スライドには、1枚の絵が示され、フランス語で「CHINE」と書かれたパイを切り分けている人々はどこの国を象徴しているかが確認される。



その後、清と朝鮮における改革の様子が説明される。1897年には、朝鮮では、大韓帝国が成立し、国王の高宗は皇帝となる。S先生から「その意図は何か？」との問いが投げかけられる。生徒たちは話し合いをし、指名された生徒が「名前を変えて強さをアピールするため」「独立したことを示すため」といった考えを言う。スライドには皇帝と国王の関係を示す図が映し出される。S先生が「これを見て皇帝と国王の違いは何だろう？」と尋ねると、生徒が「王は皇帝に仕える」と答える。つまり、皇帝から国王として認めてもらい、臣従、朝貢をするわけだ。東アジア世界の「華夷秩序」においては、王は皇帝に服属する存在で、大韓帝国は中国との宗属関係を完全に断ち切り、完全な独立国であることを内外に示す意図があったことが確認される。

S先生からの次の投げかけは「列強は自国の勢力範囲で何をしたのか？」である。色分けされた地図を見ながら生徒たちは意見交換する。指名された生徒が「鉄道をつくった」と答える。鉄道が敷設され、自然が破壊され、民衆の不安や反感が増す。それと共に、教会が建設され、宣教師による布教が広がる。すると、農民の自衛組織だった義和団が排外運動をおこし、1900年に北京の外国公使館を包囲するに至る。清の保守派は、これを利用して各国に宣戦布告する、これが義和団戦争である。日本、ロシアをはじめとする8か国連合は北京を占領し、清は敗北する。1901年には、北京議定書が結ばれ、巨額の賠償金を支払うことや外国軍隊が北京に駐留することになる。

正直に言うと、私は高校生の時、歴史の授業はあまり好きではなかった。年号と史実の羅列を暗記するだけの科目に思えたからだ。しかし、S先生の授業に参加して、歴史を学ぶことは楽しいなと率直に感じた。歴史には時代背景や因果関係、時の為政者の考え等があり、いずれも流れるようにつながっている。歴史を学ぶことで過去を知り、過去を学ぶことで未来へ生かすことができるのではないだろうか。そんなことを感じた授業であった。

(共学共高とは：本校のディプロマポリシー（育てたい生徒像）の一つで、「共に学び、共に高め合う」生徒の姿を表す）